



若い人たちに語り継ぎたい、
次の世代に残しておきたい。
貴重な話をお届けしますー。

あすへひとこと

いつの時代までも残したい

邑楽町の昔ばなし



わずかに現存する中野紺の織物。中野紺はその生産工程や生産用具一式を含めて町指定重要有形民俗文化財として登録されています

大字中野

中野は三方を沼や湿地に囲まれた自然堤防であり、沼地に囲まれた中の地ということで中野という地名になったと思われま。

中野を新田氏が領有したのは、文永2年(1265)佐貫氏の力が衰えたころ、新田氏の一族、大島二郎景継が今の中野小学校の西(神光寺)に中野城を築いたとされています。

当時の中野周辺には、西に片岡村(現在の蛭沼、篠塚北部)、北には岩崎村(千原田、向地あたり)、南部には箱田村(光善寺あたり)、東部には鶉村などがあつたと思われ、中野はこれらの村々に囲まれた人家の散在する原野ではなかったかと思われま。

中野紺

明治後期に作られた中野紺は、大正期の全盛期には西の大和紺(奈良県)と並び東の中野紺と呼ばれ、日本を代表する夏向きの木綿紺として知られました。全盛期には大小140軒余りの機屋があり、それが競い合つて新しい柄を生み出しました。当時の製品は多種多様で、黒茶紺、紺紺、茶紺、そして中野紺を代表する白紺などがありました。

なお、中野紺は賃機制度により、織り子は機屋から織機と原料と糸を借り受け、製品を納めて賃金を受け取るという方式で生産されてきました。この仕事は貧しい農村であつて、農業の副業として唯一の現金収入の手段であつたため、この織り子も朝早くから夜遅くまで機を織っていたのです。

もともと当時の大字中野は農村地帯で貧しい生活をしていました。しかし中野紺によつて現金収入の手段を得た村は活気に満ち、旧中野郵便局(現在の群馬銀行付近)を中心とした東西の通りには商店が建ち並び、「中野銀座通り」と呼ばれる繁華街になりました。明治後期には電灯が付き、大正6年には中原鉄道(現在の東武鉄道小泉線)が敷かれました。また、大正14年には電話も開通して、名実ともに中心街となりました。その年には劇場「中野倶楽部」もオープンし、当時の娯楽の殿堂でした。

こうした隆盛を極めた中野紺ですが、昭和12年の綿糸統制により、機を織り続けることが困難となりました。戦後この統制は解除しましたが、流行の変化や生産を担う農家の経済状況の変化などにより、中野紺はついに姿を消しました。百年余り続いた伝統工芸品、中野紺の反物や着物もわずかに現存するのみです。

【発行】邑楽町老人クラブ連合会 【編集】あすへひとこと編集委員会
(平成28年3月31日発行「邑楽町の地名(第十一集)あすへひとこと」)より一部抜粋

ひとりごと From editors

▶生涯学習課のページ「JOY」。主に教室・講座の案内をするインフォメーションコーナーが盛り盛りです。コロナ禍で幾度となく中止や延期を余儀なくされているにも関わらず、掲載スペースが足りない事態。現場の「生涯学習を止めない！」の声に、レイアウトにも工夫です。
▶人事異動でJOY担当になって1年半。インタビューをする、写真を撮るなどは、それまでと比べようもないほど激減。それでも機会はある訳ですが、ある日の取材でAさんは私に「あら！広報に戻れたの?」と。「戻ったの?」ではなく「戻れたの?」と。この「つ」と「れ」の一字から伝わるニュアンスはだいぶ異なりますね(笑)。一字で変わる伝わり方は言葉の面白さであり難しさ。一言の真意は本人のみぞ知る。(深澤)



朱に雫
(多々良沼公園)



Photo 原田八重子(記録ボランティア)



編集・発行 邑楽町役場企画課

〒370-0692(住所記入不要)

☎0276-88-5511(代表)

☎0276-47-5007(企画課直通)

☎0276-89-0136

https://www.town.ora.gunma.jp
koho@swan.town.ora.gunma.jp

お知らせメール

配信を希望する人は、右のQRコードから、ご登録をお願いします。
http://cc9.easypocket.jp/(R+1777+PC)
http://cc9.easypocket.jp/K/(携帯電話)



(R+1777+PC)



(携帯電話)